様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７２０１４０

研究課題名（和文）ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成：歌謡集写本と旋律の分析を通して

研究課題名（英文）The Formation of Genre in Burmese Classical Songs with Special Reference to Song Manuscripts and Melodies

研究代表者
井上　さゆり（Inoue, Sayuri）

大阪大学・言語文化研究科（研究院）・准教授

研究者番号：４０４４７５０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,000,000円、（間接経費）　900,000円

研究成果の概要（和文）：各年度に現地調査（ミャンマー連邦マンダレー、ヤンゴン）を行い、古典歌謡教授方法の調査、記録を行った。その作業により古典歌謡におけるジャンル区分の指標を明らかにし、博士論文にこれら作業を加味する形で加筆修正を行い単著『ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成』を出版した。また、古典歌謡のカセットテープのデジタル化の作業を90本分進めデータベースを作成した。アメリカの民族音楽学者Judith Beckerから寄贈された1960年代の希少なビルマのレコードのデジタル化もほぼ終了した。また、24年度から25年度にかけては上記単著を英訳し、現地研究者のチェックを経て加筆修正し出版し、本研究課題を完了した。

研究成果の概要（英文）：I recorded the method of Burmese classical song tradition at Mandalay in Myanmar each year. I explored the indexes for classification of song genre, and I published my book which was based on my Ph.d dissertation. I digitized about ninety cassette tapes of Burmese classical songs which I collected. I also digitized some Burmese records, which are hard to find now, that Professor Judith Becker devolved to me. I also published my book which is English translation of my aforementioned book.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：ビルマ歌謡　ビルマ音楽　外国文学　ジャンル　写本　貝葉

１．研究開始当初の背景

(1) 従来、ビルマ古典歌謡に関する研究は、現地学者による文学作品としての分析、もしくは国外の音楽学者による調律・音階の分析に終始してきた。文学としての研究は、調査・記述及び近現代文学の歴史的・社会的脈絡での解釈にとどまっており、作品を歴史・社会背景へ還元することが目的とされてきたと言える。特にビルマ文学・歌謡については、作品の列挙と解説に終始したHpe Maung Tin の『ミャンマー文学史』（1947年）に代表される文学史の描き方によって、ビルマ文学・歌謡についての枠組みが規定され、そこで提示される歌謡ジャンルが自明のものとして捉えられきた。一方で、作品構造と創作技法の分析の観点からの研究はほとんど為されていない。

(2) 1960年代以降、主に国外の音楽学者によって、ビルマ古典歌謡の音楽構造の分析が行われてきたが、確認できる演奏をもとにその構造を分析し示すに留まり、作品が作られた時代にさかのぼって検証した研究は為されていない。

(3) 近年では文学や音楽について、政府による保存等の取り組みに注目した政治的観点からの研究がいくつか為されているが、歌謡の一次資料に基づいた研究ではなく、創作の営みそのものが展開していく軸となる創作技法、創作概念が存在することは無視されている。

以上のいずれの研究にも共通している問題点は、現在「伝統歌謡」として捉えられている作品の総体について、その枠組みがどのように形成されたのかを検討することなしに、分析が試みられていることである。また、歌謡は豊富な文献資料を有するにも関わらず、そのアクセスと利用の困難さから、これまでどの研究者によっても十分な資料調査が為されていない。

(4) 報告者は1999年～2001年にミャンマー文化大学音楽学部に留学し、歌謡の歌唱法と竪琴演奏を学ぶ中で、歌謡の創作が既存の作品に基づく技法を主軸としていることを確認した。平成16～18年度の科研費補助金（特別研究員奨励費）の研究において、これまで現地の学者によって断片的にのみ言及されてきた一次資料である貝葉写本・折り畳み写本のうち、ミャンマー国立図書館、ヤンゴン大学中央図書館、ヤンゴン大学歴史研究センター所蔵の歌謡関係の写本を全て調査し、従来全く手付かずであった一次資料のデータベースを作成した。そして、これらの資料の分析を、平成19年度～平成22年度科研費補助金（若手研究（B））の研究（研究課題「ビルマ歌謡におけるジャンル形成：18－19世紀の歌謡創作技法の分析を中心として」）の一環として行い、特に弦歌と鼓歌の二つのジャンルについてその形成過程を検討してきた。さらに、現在に伝えられている歌謡ジャンル概念が成立したのは、古典歌謡が18～19世紀に大量に作られた後の19世紀末頃であることを明らかにした。古典歌謡には弦歌、編み歌、承前歌、鼓歌、アユタヤ歌、モン歌他合計20前後のジャンル分類が行われているが、こうしたジャンル区分は歌謡集によって異なり、実際には明確な定義をもたない。

また、特に重要な点として、弦歌と鼓歌の創作技法の分析において、創作が既存の作品を借用、引用しながら行われていたことを明らかにしたことを挙げたい。借用、引用、時には替え歌としての作り変えが行われるなど、歌謡の創作技法を分析することによって、作品相互の関係を明らかにしていくことができた。さらに、既存の作品に基づきつつジャンルが分化していった過程を弦歌と鼓歌について検討した。以上の分析によって、詠み人知らずで作られた時代の分からない大量の作品についても歴史的に位置づけていくことができる重要な分析枠組みを提示することができた。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は、ビルマ国文学の核である「タチンジー（大歌謡）」と総称される古典歌謡におけるジャンル形成過程を明らかにすることである。その手順として、①申請者がこれまでの科研費による研究で調査・撮影してきた貝葉・折り畳み写本等の一次資料の分析と新たな資料の発掘を行い、②口承されてきた歌謡の旋律形及び伴奏となる楽器演奏技法の記録・分析から歌謡作品が作られた当時の音楽構造を再構成し、③以上の歌詞と音楽構造の両方の面から創作技法を分析することによって古典歌謡におけるジャンル形成過程を明らかにするとともに、伝承と創作の営みとしての歌謡史のダイナミズムを描き出す。

(2)具体的な研究目的は次の通りである。本研究では、報告者がこれまで行ってきた歌謡の二大ジャンルである弦歌と鼓歌の分析に加え、弦歌から鼓歌への変遷過程に現れたと考えられる編み歌、承前歌、ならびに鼓歌と同時代に作られたと考えられるアユタヤ歌、モン歌といったジャンルをあわせて、古典歌謡の中心的なジャンルの形成過程を明らかにする。本研究では、作品相互の関係を明らかにしていく上記の創作技法の分析方法を用いて、個々の作品の創作技法を丹念に見ていくことによって、従来ジャンルごとに分けて捉えられてきた歌謡を包括的に捉えなおす。そして、古典歌謡の中心的なジャンルについて、作品の生成とジャンル形成過程を明らかにする。古典歌謡にはさらに数多くのジャンル分類があるが、本研究で主要なジャンルについてその形成過程を検討することによって、将来的にビルマ古典歌謡におけるジャンル形成過程を全体的に解明していく土台を作る。

３．研究の方法
(1) 一次資料分析と新たな資料の収集：報告者がこれまで調査・デジタル撮影した貝葉・折り畳み写本のうち、歌謡が掲載されたもの(貝葉17点、折り畳み写本18点）を検討し、作品群の間テクスト性ならびにジャンル分類過程を分析する。加えて、竪琴奏者故ウー・ミィンマウンが1960年代以降書き記した楽譜の手稿を撮影・記録する。

(2) 音楽構造の分析：これまで収集してきた録音資料（カセットテープ、CD約450本）に加え、現在伝承される古典歌謡の実演の記録を行い（最も多くの歌謡を伝承するウー・イーヌエ氏の演奏を中心に）、楽譜に記録されずに口承される曲の記録を進める。これらの録音資料と伝承過程の分析から、作品が作られた当時の音楽構造（旋律及び楽器伴奏部分）を再構成する。また、特定の旋律形が複数の作品に使用される様子を分析する。

４．研究成果
(1)古典歌謡の口頭伝承の模様の記録：各年度に現地調査（ミャンマー連邦、マンダレー市）を行い、口頭伝承で伝えられる古典歌謡の教授の様子をビデオ撮影、音源録音などを行い記録した。報告者が 2007 年以降連続的に記録を取っている、古典歌謡の学習過程と進度についてまとまったデータを蓄積することができた。また、報告者自身も竪琴演奏の教授を 1999 年以降受けており、本研究期間の調査においてもマンダレーのドー・キンメイ氏に口頭伝承で数曲伝承を受けた。古典歌謡のジャンル形成過程を明らかにするためには各ジャンルごとの特徴的な旋律形を把握することが重要であり、口頭伝承で時間をかけて曲を体得することが最も有効なその手段である。特に、古典歌謡の中でも最も難易度の高く、報告者の研究の中心的ジャンルでもあるパッピョー歌謡を二曲体得した。また、現地随一の歌手ドー・イーイータンとの演奏を通じ、演奏の即興性についても体得し、記録を行った。

(2)手書き楽譜の撮影とデータベース作成：ビルマ古典歌謡は口頭伝承で伝えられるが、1960 年代よりマンダレーの竪琴奏者故ウー・ミィンマウンが自身の弟子の指導のために大量の手書き楽譜を残している。これはウー・ミィンマウンの弟子や関係者のみに使用されている限定的なものであるが、複雑な演奏個所も全て詳細に記述した非常に希少な資料である。妻であり、報告者の竪琴の師であるドー・キンメイの許可を得て、その撮影に取り組み始め、現在、画像にして 1000 枚ほどの撮影を終えた。ウー・ミィンマウンは弟子それぞれの能力に合わせた楽譜をその都度手書きで書いて残しており、同じ曲に複数の楽譜が残されている。それぞれ演奏パターンが異なるため、今後、ビルマ音楽の即興性の分析に役立つデータとなりうる重要な資料として、作業を進めている。撮影済みの画像については画像編集作業を進め、曲目等のデータをリスト化している。ウー・ミィンマウンは 20 世紀最大の竪琴奏者として位置づけられる非常に著名な奏者であり、複雑な演奏パターンも全て五線譜や数字譜に現わし残している。劣化が進む貴重な楽譜資料の撮影は保存の意味も持ち、故ウー・ミィンマウンの家族の許可と協力のもと、作業を順調に進めてきた。

(3)アナログ音源のデジタル化とデータベース作成：報告者が収集してきたビルマ古典音楽、20 世紀初頭の大衆歌謡のカセットテープ音源、及びアメリカの民族音楽学者 Judith Becker 氏から譲渡された希少なビルマのレコードのデジタル化を進めた。パソコンに取り込んでのデジタル化後に編集作業を行い、データベース作成を進めた。Judith Becker 氏譲渡のレコードは現在では現地でも希少な価値を持ち、1960 年代当時の録音資料として、また当時の録音の取り組みを伺える貴重な資料である。

(4)演奏実践の記録：古典音楽の演奏形式は、楽器や音階の西洋化などの影響を受け、楽器の構造や調律法が大きく変化してきている。特に、祭事などで演奏される楽器や楽団では、聴衆に受けるものを演奏する必要から、このような傾向が強い。祭事で演奏されることの多いサインワイン楽団は楽団ごとに編成や楽器の構造さえも異なるほどである。得度式に先立つショーでの演奏に複数回随伴し、真夜中まで行われる演奏実践を撮影記録した。古典歌謡の旋律を取り入れつつ、新しく作曲された曲の演奏や、伝統的な楽器による現代ポップスの演奏の実態などを観察し記録することができた。

(5)和書、洋書（単著）の出版：報告者の博士論文に基づき、本研究期間の作業結果を反映し加筆修正する形で、まずは日本語で『ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成』（大阪大学出版会、2011 年）を出版した。続いて英語翻訳を行い、*The Formation of Genre in Burmese Classical Songs* のタイトルで英語著書を出版した（大阪大学出版会、2014 年）。特に英語版の作業については、現地研究者による数回の草稿のチェックを経て、部分的に大きく書き直しを行った。いずれも科研費研究成果公開促進費によって出版を行った。両出版物によって本研究課題の一応の完了とし、その研究成果を国内外に向けて発信したかたちである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　5 件）
①井上　さゆり、「ビルマ古典芸能の伝承」、AA 研ビルマ語言語研修文化講演（招待講演）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2012 年 8 月 17 日
②井上　さゆり、「ビルマ古典歌謡における書承の変遷」、東南アジア社会と文化研究会、京都大学、2012 年 5 月 30 日
③井上　さゆり、“Hsaya U Myint Maung ye notation i chezu（ウー・ミィンマウンの記譜）、竪琴奏者ウー・ミィンマウン没後 10 周年記念式典、ミャンマー連邦マンダレー、2011 年 9 月 5 日
④井上　さゆり、“Song Genre in the Manuscripts of Myawadi Mingyi U Sa's Anthology,” Celebrating the Legacy of U Ko Ko: Symposium and Concerts、ミャンマー連邦ヤンゴン、2011 年 6 月 26 日
⑤井上　さゆり、“Oral and Written Transmission of Burmese Classical Songs,” International Burma Studies Conference, Universite de Provence, Marseille, フランス, 2010 年 7 月 9 日

〔図書〕（計　4 件）
①井上　さゆり、大阪大学出版会、The Formation of Genre in Burmese Classical Songs、2014 年、269 p.
②井上　さゆり、京都造形芸術大学東北芸術工科大学出版局藝術学舎、「ミャンマーの芸能」、赤松紀彦編『アジアの芸能史文学上演篇Ⅱ朝鮮半島、インド、東南アジアの詩と芸能』、2014 年、pp. 145-155
③井上　さゆり、明石書店、「第 36 章生活の中の音楽芸能－演奏と伝承の場」、田村克己・松田正彦編『ミャンマーを知るための 60 章』、2013 年、pp. 202-206
④井上　さゆり、大阪大学出版会、『ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成』、2011 年、375 p.

６．研究組織
(1)研究代表者
井上　さゆり（INOUE, Sayuri）
大阪大学・言語文化研究科言語社会専攻・准教授
研究者番号：４０４４７５０３